

オルタセミナー:2010年度前期

2010. 7. 18

生・労働・運動ネット

富山市神通町3-5-3

TEL 076-441-7843

FAX 076-444-6093

ニュースレター

「イントロダクション：オルタセミナーを始めるにあたって」 (6/20)での論議から

「生・労働・運動ネット」では、07年春から、「自己責任論」のような、私たちがいつのまにか身につけてしまっている価値観を「学びすてる」(unlearn)ための場として、アンラーニングプロジェクトを営んできました。現在、それに代わる新たな討論・学びの場として、「オルタセミナー」がスタートしています。6月20日(日)、「オルタセミナー・2010年度前期:『日本』の構成的解体を模索する」の皮切りとして、「イントロダクション:オルタセミナーを始めるにあたって」が行なわれました。その中で、「オルタセミナー」の進め方や、今回、「オルタセミナー」を新たにスタートさせることで私・たちは何をを目指したいのか等をめぐる提起が、行われました。以下、当日の論議のアウトラインを紹介します。(なお、以下の提起での「私」は、提起者自身を指す。)

□「オルタナティブ」な世界のあり方をめぐる論議の場を創りだしたい

全世界を「市場原理」で覆い尽くし、福祉や公共サービスといった市場化になじまないはずのものまでも「商品」化するネオリベリズムによって、日本も含めた、いわゆる「先進国」では、長い時間をかけて形成されてきた福祉国家が大きく破壊されてきています。この数年、富山でも駅の地下道で寝ているホームレスの人たちの姿をよく見かけるようになっていきますし、何よりも私たち自身が将来の生活の見通しがもてなくなっています。かつては、学校を卒業した後、会社に就職して定年まで勤め上げれば、老後の生活も含めてそれなりの暮らしができるという「日本型雇用社会」が健在だった時代もありました。しかし、今ではそういった終身雇用的なライフスタイルはすっかり解体されてしまい、もはや、資本主義は人間の一生を保障しないという状況になっています。

私・たちに先んじてネオリベに対する批判的な言論活動やアクションを展開している人たちの言葉を通じて、「生の保障」の破壊に対抗するための手がかりを得たいという思いから、07年春からの約3年間、私・たちは自由な討論・学びの場として、アンラーニングプロジェクトを営んできました。しかし、不遜な言い方に聞こえるかもしれませんが、そのような意味では、もはや、外に学ぶことはほとんどないのではないかという感じがしています。

現在、この国では、一方の端にホームレスの人たちがいて、もう一方の端には基地に包囲されながら、基地の更なる拡張化に反対する沖縄の人たちがいるというように、様々な問題がいろんな形で存在しているわけです。そうした個々の問題を貫いて、この列島社会をどうするかという大きなビジョンを

描き出すための言葉をどう創りだすのか。そのことが今、私たちに問われているように思います。現在、日本社会を思う存分、蹂躪(じゅうりん)してきたネオリベがかっての勢いを失っていますが、その「次」の社会を語ることを、ネオリベを信奉してきた政治屋連中にまかせるわけにはいきません。「言葉」と「アクション」とを別個のものとして捉えるのではなく、今こそ、街頭でのアクションを豊かに生み出すような「思想」の言葉が求められているはずです。そのためにも、他の人たちの取り組みを「後追い」的に学ぶといったスタンスではなく、自分たちの「立ち位置」を変えて前に出たいという思いから、これまでのアンラーニングプロジェクトに代えて、「オルタセミナー」をスタートさせました。

「オルタセミナー」というのは、要するに、「オルタナティブ」という言葉と「セミナー」という言葉とを組み合わせてつくった言葉です。英語で「オルタナティブ」(alternative)と言うと、「今のようにない、もう1つの」という意味の形容詞であると共に、「選択肢」という名詞でもあります。「セミナー」というのは、日本の大学では「ゼミナール」とか「ゼミ」とか呼ばれていますが、少人数で学生のレポートを中心に進めるような授業のスタイルです。しかし、それが、大教室での講義形式の授業と比べて、必ずしも優れた学びの場であるとは言えません。そこで教官の単なる「猿まね」をやらされたり、就職の面倒を見てもらえたりする一方で指導教官に頭が上がらないという構図があったりするわけです。「オルタセミナー」という言葉には、そういった閉鎖的な学びのあり方を壊して、この列島社会を私たちはどうしたいのかをめぐる大きなビジョンを考えあうことに向けた、共同のスペースにしていきたいという思いを込めているわけです。

「オルタセミナー」は、そのような学びのあり方に対する「オルタナティブ」であると共に、今のようにない、もう1つの「オルタナティブ」な世界をどう創りだすのかを考えあうための場でもあります。ただ、「オルタナティブ」な世界を考えあうとは言っても、例えば、「戦争のない平和な世界を！」といった具体的なイメージで、そのことを考えたいということではありません。むしろ、私たちを生かさないこの世界をどのように壊すかということが、同時に、今のようにない世界をどのように創りだすかということでもあるような論議をしていきたいと考えています。そのためにも、私たちの「共有物」として、どのような言葉や「問い」を生み出していくのかを考えあう場にしていきたいと思っています。

□『『日本』の構成的解体』に向けた論議を進めたい

「オルタセミナー・2010年度前期」では、「『日本』の構成的解体を模索する」ということがテーマになっていますが、「構成」と「解体」という正反対の言葉が、「～的」という言葉で結びつけられていることの意味を、ぜひ考えてもらえればと思います。私としては、今の世の中のあり方を壊さない限り、新しい世の中を創りだすことはできないと考えています。先ほども言いましたが、現在のような世の中を壊すことの中に、私たちが創り出したい「オルタナティブ」な世の中を創りだすということが既に含まれている。そんな壊し方とはどのようなものなのかを、考えあいたいということなのです。

「オルタセミナー」についてもう少し具体的に説明しますと、それは大きく言って、「プロジェクトA:いくつもの『日本』へ」と、「プロジェクトB:いくつもの『民』から」という2つの部分に分かれています。まず、「プロジェクトA:いくつもの『日本』へ」ということからお話ししますと、この数ヶ月間、沖縄の問題が改めて大きく取り上げられてきましたが、私・たちも、そのことの意味を考えることを迫られてきました。沖縄には独自の思想の系譜がありますが、その中には「沖縄独立論」という考え方をする人たちもいました。それが現実的にどこまで可能かは別にして、「沖縄独立」という言葉を自分たちの目の前に置いてみるだけで、日本は決して「完結」などしてはいないという印象を受けるわけです。ヤマトとの関係をどうするかについては、沖縄には「独立論」以外にも、いくつもの思想的な流れがあります。その中には

「反復帰論」という形で、沖縄は自らを裏切るような日本国家に「復帰」することでいいのかという「問い」を、現在までずっと持続してきている人たちもいます。沖縄が日本国家に完全に包摂されている限り、米軍基地を押しつけられる状況を拒否することはできない。そうであれば、日本国家からどのように距離を取って、ヤマトとは違う構想で、自分たちが生きている沖縄という空間をつくりかえるのか。沖縄の人たちは、そういった「問い」を、私たちが富山のことを考えるのとは比べようもないほどの切実さで考えようとしてきたように思います。

私たちは学校で日本が「単一民族国家」だと教えられています。かつては沖縄は独立した王国でしたし、北海道にはアイヌの人たちが現にいるわけです。そのように、何に注目して見るかによって、視点ごとに「いくつもの『日本』」が見えてきます。それは地理的・民族的な区分線がどう引かれているかというよりも、日本の中に存在している、目には見えない無数の「切断面」のようなものをどのように見いだすのか、ということではないかと思えます。

私が「いくつもの『日本』」ということを考えるようになったのは、この間の沖縄の〈声〉に触発されてきたところが大きくありますが、「プロジェクトA」では、沖縄が日本国家からの「離脱」・「自立」を考えてきた思想的な営みの系譜を、ぜひ探っていきたいと考えています。

「プロジェクトB:いくつもの『民』から」ということについて言えば、私・たちは、この間、「ホームレス」状態にある人たちを支援する営みを続けてきています。そうした人たちがたどってきた生い立ちを聞いてみると、この人たちは日本を構成する『国民』とは見なされてこなかったのではないかと感じてしまうことがよくあります。それこそ、戸籍も住民票も関係ないような生き方をしている、彼らが寝ている同じ地下道を通り過ぎる勤め人などとは全く違う世界があるわけです。私たちは、そうした人たちを「困民」と呼んでいます。日本社会は国民ということで1つのまとまりをなしているかのように見えますが、実は、すでにいろいろな「民」に分かれてしまっているように思います。

私たちは、「困民」という言葉を愛用していますが、似たような意味では、「貧民」や「窮民」、「棄民」という言葉もあります。それは他人からそう名付けられると同時に、自分でもそのように名付け返す時の言葉でもあります。その際に、自分をどのような「民」だと捉えるかによって、日本の見え方が全然、違ってくるのではないかと思えます。ですから、「いくつもの『民』から」という時の「民」とは、単に経済状態の違いがあるということだけではなく、「生の困難さ」ということがどれだけその人に累積しているかによって他の人から違う存在として見られるし、また、その人自身が違う風に世の中を見ているということでもあります。

そのように、それぞれの「民」から日本を見る時にそれがどう見えるのか、また、それぞれの「民」なりに日本をどう壊したいのかということがあるはず。『国民』である私たちの存在が壊れていき、何か違う存在へと「変成」していくことを通じて、この列島社会も変えられていく。そのように、「プロジェクトB」では、「いくつもの『民』」ということに即して、『『日本』の構成的解体』への「道筋」をどのように創りだすことができるのかを考えあいたいと思っています。

□「フリートーク」での論議から

以上のような提起が行われた後、今回の提起をめぐって参加者同士で活発な討論や意見交換が行われました。以下、そのアウトラインを紹介します。

今回の「オルタセミナー」での提起に対して、まず、「いくつもの『日本』」ということに比べて、「いくつもの『民』」ということがイメージしにくい、という意見が出されていました。それに対しては、「民」というの

は、「ホームレス」状態にある人たちもそうだし、「シングルマザー」や「フリーター」、「ニート」と呼ばれるような人たちも、ある種の「民」であるだろう、という発言がありました。劣った労働力であると思われていることや、賃労働をしないということがそうした人たちへの差別の根本にあると思うが、そうならば、私たちとしてはそうした人たちの「無能力」をまず、肯定することから出発したいという発言も併せて出していました。

また、今回の「フリートーク」では、親の経済状態がそのまま、子どもの学習意欲の有無に直結したり、教室に入れずに保健室や相談室に「登校」をする生徒が多数いるといったように、現在の学校が「ニート」予備層を生み出す場所になっている現状をめぐって、質問や意見交換が行われました。現在、終身雇用的なライフスタイルが政策的に解体されてきている中で、子どもたちはどのような大人になるかというモデルをもてないでいるし、そもそも大人になりたいとは思っていないのではないのか。それは教師個人の努力不足や、教育カリキュラムの問題などではまったくくない。そのような意味で、学校で起きていることを学校の中で変えるのは不可能なことではないかという発言が、そのような論議の中でありました。

しかし、そうした状況であれば、なおさら、教師として目の前にいる子どもたちをどうするのかということがあるのではないかという意見も、そうした論議の中で出ていました。まだ戦後間もない時期に、GHQの教育政策に対抗して、「土着の思想と行動を！」というスローガンを掲げて出発した、「郷土教育運動」というものがあります。そのメンバーであった教師から自分としては大きな影響を受けたが、そのような経験は、今でも子どもたちにとって有効性を失っていないのではないのか。民主的な教育のあり方を目指す「郷土教育運動」は文部省によって厳しく弾圧されたが、そうした教師がいなくなったことも現在のよな学校状況の一因になっているのではないのか、という発言が出されていました。

そのような意見に対して、「郷土教育運動」のような教育運動が、かつてのような勢いや「輝き」を失っているのは、文部科学省や教育委員会の締め付けだけによるものなのか、という疑問が出されていました。まず、現在、学校にいる生徒の側に、そうした教師の「熱意」に反応するための「回路」が無くなってきているし、そのような戦後民主主義的な理念に基づく教育運動自体の思想的な限界ということもあるはずです。

そうした論議の中で、歴史学者の原武史の「滝山コミュニオン 1974」という本のことが言及されていました。原武史は、東京郊外の滝山団地に隣接する自分の出身小学校の教師による、「学級・学年集団づくり」の実践を、なつかしさと同時に、ある種の苦々しさをこめて回想しています。その中で、教師の集団主義的な理想主義が、生徒の心と体を様々な形で管理し、秩序化していく様子が詳しく描かれています。それは文部省による教育政策に対抗するものではあっても、文部省とは異なる形ではあれ、教育によって優良な「国民」をつくらうとすること自体を問うといった視点は、そこにはありません。今回の「フリートーク」の中では、「ニート」と呼ばれる人たちを「若者自立塾」といった施設に入れて「根性」を鍛え直せばいいといった、一部のマスコミでの粗雑な論調に対する批判が出ていました。そのような「無能」と見なされる人たちへの「教育的」な視線や、それとは地続きであるような「国民」という枠組みを問わない思考法と、私たちはどこまで決別しきれるのか。そのことも、今後、「いくつもの『民』」ということをめぐる私たちが論議を進めようとする際の、重要なポイントであるように思います。

「負うた子に教えられる」という日本の諺があります。そこには、大人が子どものもつ無垢さや偏見のない目によって、自分自身のあり方を捉えなおし、新たな発見や「気づき」を得る、といった意味も含まれているように思います。そのように、「教育的」な上下関係とは無縁なところで、他者のあり方に触発されて自分自身が変わるということが、今、どのようにあり得るのか。同時に、そのことが、この日本社会が変わることとどのように「接続」しうるのか。この後の「オルタセミナー」では、そういった通常の運動的な論議では、論じられないようなことも含めて、活発な論議を進めていきたいと思っています。